Workshop・ワークショップ

子どもワークショップ

文字は息からできたっ!?
― 言葉の生まれるとき

安田 登　能楽師
高木久美　アーティスト
槻宅 聡　能楽師

子供たちが能の方法を習って、文字の生まれたヒミツに楽しく迫る。
古代人の手形「ネガティブハンド」、漢字のルーツ「甲骨文字」から文字が生まれるプロセスを体験。

子供たちを文字の原初体験へとナビゲーションしてくださったのは、能楽師ワキ方の安田登先生、笛方の槻宅聡先生、芸術大学でアートを研究する高木久美子先生。集まったのは五歳から十二歳の子供たち。お母さん、お父さんが付き添う小さな子供もいます。

さっそく、子供たちに何枚もの不思議な洞窟の写真が見せられます。「どんなイメージかな、みんな自由に話してみてください」。高木先生の問いかけに「人がいる」「手がたくさん！」「動物見つけたよ」「地獄絵みたいな感じ」「おばけみたいだ！」と、口々に話し出す子供たち。「これってどうやってできたのかな。手のスタンプ、やったことある?」。高木先生は、古代洞窟の壁面に描かれた人の手形「ネガテイブハンド」の写真を素材に、その意味を説明していきます。

「昔の人、何万年も前の人たちが洞窟で、岩を砕いたものを口でクチュクチュして、プゥーッて息で吹きつけました。それで手の形が残っています。今日はみんなにこれをやってもらいます」。子供たちはギョッとして、「でも、みんな岩はイヤだろうから、ジュースにしようね」にひと安心。「何ジュース?」「アオ汁はヤダッ～」「リンゴジュースがいい」と、にぎやかです。

ついで、息のお稽古です。槻宅先生が能の笛を吹いて、それを全員で謡います。「おひゃーりとひゃーり。ひゃーりとろうろ」。何度も、大きな声を出して、息をコントロールします。「もう一回！せえ～の！」「おひゃーりとひゃーり。ひゃーりとろうろ」。安田先生は息の使い方、集中のさせ方のコツを伝授。子供たちの息もだんだんと強くなって、調子が出てきます。息の準備ができたところで、森を抜け、水田の横を通って、屋外の「キッチンガーデン」へ移動します。最初は水で予行練習。口からブーッと出す水しぶきに、シャツはあっという間にベショベショに。でも暑い夏の盛りですから、みんな平気、平気。お昼ごはんのあと、改めて午前中の歌をもう一度練習して、いよいよ本番に挑戦です。

最初に高木先生がお手本を見せます。白いシーツに手のカタチがくっきりと。ワーッと歓声があがると、もう子供たちはとまりません。「しっかりと手をくっつけて、もっと近づいてね」。お役ゴメンになつた大きなシーツを岩壁に見立てて、われさきにそこに手を置いて。ぶどうジユースを口いっぱいに含んで、鍛えた息を何度も吹きかけていきます。「大成功！」「あーっ、半分しかない！」。できばえを自慢するやら、失敗に笑うやらと大騒ぎして、みんなほんとうに楽しそうです。

そのあと安田先生が甲骨文字の成り立ちを楽しく講義。子供たちの名前の一文字を選んで準備してくれた甲骨文字を、さまざまな色を使って指で描く作業に集中、熱中。からだ一杯で感じた文字の不思議に大興奮の夏の一日でした。

「みんな全身で楽しんでいましたね。ネガティブハンドの新しい意味がイメージできるような直球の反応、感想の言葉がすごく刺激的でした」と手応えを語る高木久美先生。

午前中に練習した息のコントロールの復習です。槻宅先生が大きな声で「おひゃーりとひゃーり。ひゃーりとろうろ」と謡います。みんなしっかりと覚えていて、調子はバッチリ。

手をしっかりと押し当てて、ぶどうジュースをピューッと勢いよく吹き付けます。シャツの前はみんなぶどう色。何度も夢中に挑戦してネガティブハンドの「壁画」作りにあきることがありません。

鍛えた息の技を使って面白いアート作品にも挑戦。子供たちの熱中視線を集めるのは、紙にこぼした絵の具を吹いて、自分の好きなカタチにしていくストロー・アート。

安田先生が甲骨文字のカタチと意味を解説してくださいます。「これは右手でしょ」「あっ、こっちは左手、わかる、わかる！」と、手のアートから今度は漢字の起源を探求。

子供たちのネガティブハンドのみごとな共同作品が完成。隠れて見えないけれど、シーツはもうバッチリとついた手のあとだらけ。